

静岡県におけるクレチン症マス・スクリーニング精検者の追跡調査

浜松医科大学小児科 五十嵐良雄
竹広 晃

静岡県における昭和57年1月から12月までのクレチン症マス・スクリーニングの結果と、私達が管理しているマス・スクリーニングで見出されたクレチン症、一過性高 TSH 血症のその後の経過について報告する。昨年一年間で46,164例についてクレチン症のマス・スクリーニング検査を施行し、8例(0.017%)について精検を行った。内、クレチン症として治療を行っている者3名、一過性甲状腺機能低下症と思われる者1名、精査時 TSH, T_4 、ともに正常例2名、現在精査中1名である。昭和55年に見出されたクレチン症は、現在、2歳10カ月、2歳3カ月の2名であるが、その身体発育、精神運動発達(DQ)は世常である。サイロキシンの投与量は、6.5, 4.8 $\mu\text{g}/\text{kg}/\text{日}$ 、であり、血中 T_4 も 8~15 $\mu\text{g}/\text{dl}$ に維持されている。一過性高 TSH 血症の3例中2例は、2歳、2歳4ヶ月時に TSH は、8~9 $\mu\text{U}/\text{ml}$ と正常化した。1例は2歳7ヶ月でも TSH 19 $\mu\text{U}/\text{ml}$ と依然軽度高値を示している。3例とも血中各種甲状腺ホルモン、身体発育、精神運動発達は正常である。

なおスクリーニング開始以後静岡県でのクレチン症の罹患率は、126,265例中6例、約21,000人に1人であり、他の報告より少い印象を受けるが更に長期的な観察が必要であろう。

乳児期の血中 TBG, 遊離サイロキシニンについて

浜松医科大学小児科 五十嵐良雄
竹広 晃
浜松医科大学第II内科 真坂美智子

私達は昨年の本研究会で、一過性乳児高 TSH 血症では生後6カ月までは、血中 TBG が、正常対照(10例)と比較して高値を示す傾向を認めると報告したが、今年度は、健康乳児の血中 TBG, および遊離サイロキシニンの月令による推移について検討した。

対象と方法: 母親が HB_s 抗原陽性であるため、経過観察や HBIG , HB_s ワクチンの投与を行っている乳児37例について、血中 TBG, 遊離サイロキシニンを、RIA (リアグノスト TBG[®], アマレックスフリー T_4 [®]) で測定した。内20例については継時的に(多くは1, 3, 6カ月)測定した。